

位置と環境

本遺跡は、鹿屋市街地より北東に約7kmに所在し、高隈山系西麓の標高約130mのシラス台地上に位置している。海から約2kmと近い気候は温暖で、冬でも霜が降りることは少ない。遺跡の調査範囲が南北に長いため、現地形は北側のA地点は台地の縁辺部にあたり、B・C・D地点は高隈山系からの扇状地にあたる。

調査の経緯

建設省（現国土交通省）九州建設局大隅工事事務所（現大隅河川国道事務所）が、一般国道220号古江バイパスの建設を計画し、計画路線内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会した。本遺跡は、平成6年（1994年）12月に分布調査が行われ、遺物の散布を認めた。平成9年度から本調査を行った。

遺構と遺物

本遺跡は、旧石器時代、縄文時代草創期～中期・晩期、弥生時代～近世の複合遺跡である。

旧石器時代から縄文時代草創期と考えられる遺構として、約11,500年前とされている薩摩火山灰層の下で落し穴が12基検出されている。楕円形の平面形（プラン）を持つものが多く、ほとんどの床面からは、逆茂木の痕跡が検出された。一つの谷をはさんだ両側の傾斜部と最下部の狭い範囲で集中して検出されており、当時の猟の様子がうかがえる資料である。

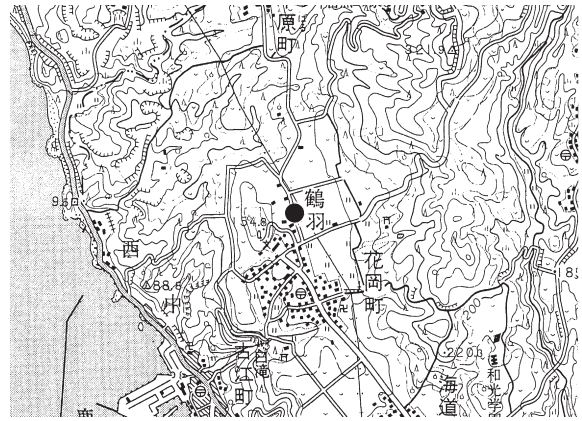
旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器文化期から細石刃文化期にかけての石器が出土している。

縄文時代では、台地の縁辺部に近いB地点から中期の春日式土器が多量に出土している。

弥生時代では、山ノ口式土器が出土している。

本遺跡の主体をなす時代は、古墳時代である。遺構として、竪穴住居跡約30軒・土壇（墓）2基等を検出している。

竪穴住居跡のなかには、弥生時代の後半から古墳時代前半のものと思われる花卉形住居跡もみられる。



第1図 根本原遺跡の位置

土壇は、地面に穴を掘って死者を葬ったものである。上部の構造は不明で、人骨も見つかっていないが、鉄鏃や短剣が副葬されていることから土壇であると認定した。土壇は、これまで主に薩摩半島で検出されているが、今回、本遺跡で検出されたことによって、鹿児島湾をはさんだ交流があったことがうかがえる。

古墳時代の土器には、辻堂原式の古い段階のものが多数出土している。

そのほか、中世以降の遺構には、掘立柱建物跡や竪穴建物跡などが検出され、青磁・白磁・陶器などの破片も出土している。

現在、発掘調査・整理作業が進行中であり、本遺跡の詳細については検討中である。

資料の所在

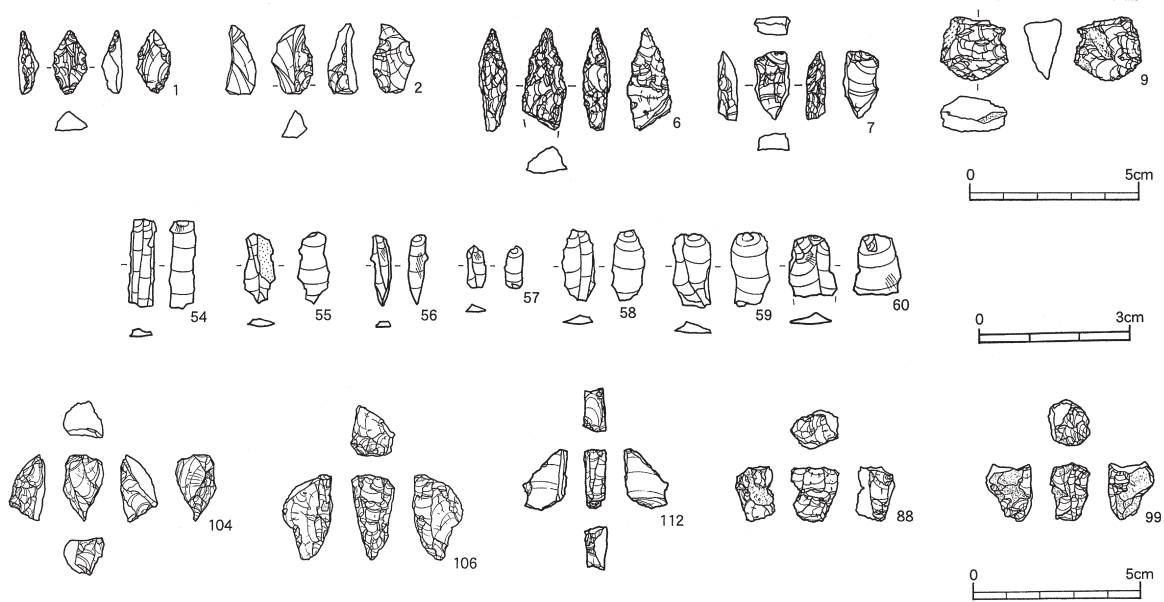
出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

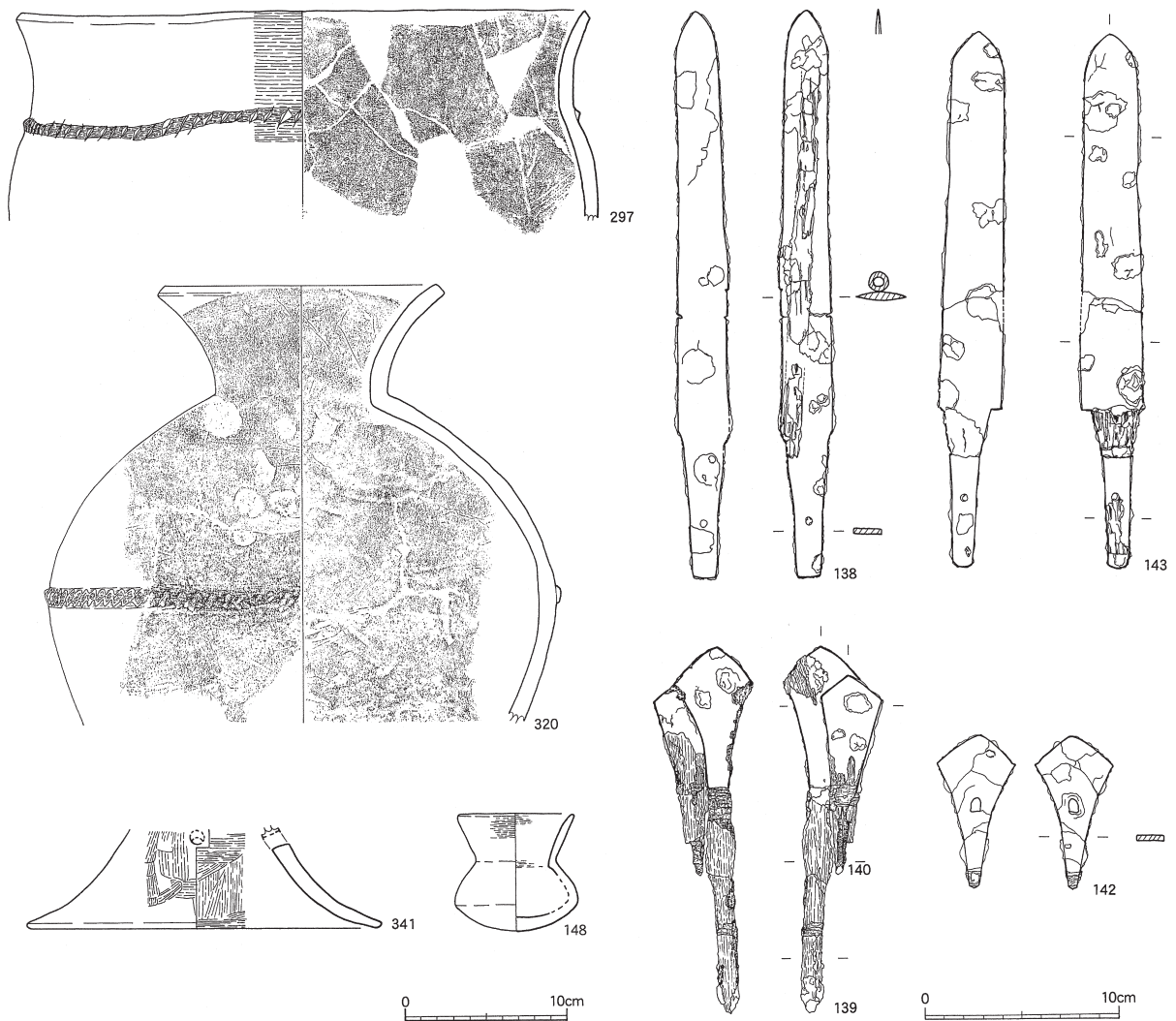
鹿児島県立埋蔵文化財センター1998～2002「根本原遺跡」『一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書』

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004「中野西遺跡・松山田西遺跡（根本原遺跡A地点）」『一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（I）『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』76

（寺原徹）



第2図 根木原遺跡出土遺物（旧石器時代）



第3図 根木原遺跡出土遺物（古墳時代）